水平線の向こうから・・・理念の大切さ、必要性

2015/1/8　　青　野　豊　一

★このまとめは、私の心を整理するためにしたもので、哲学的見地からの批評には耐えられるものではないと思われますが、ご意見やご批判には、でき得る限り返答いたします。

ヘーゲルのように言葉に酔って、「美しいことを夢見て、醜いことをする」事態になってはならない。しかし、私たちの思考は揺れ動き、「独断論のまどろみ」に落ち込み悪をなすこともある。だから、私たちは、黄信号を点滅させながら、多くの人たちとその「理念」についての討議を、事あるごとにしていくことが必要となる。

一　黄信号が点滅

科学といわれているものは、人がどんな質問をしても答えを出してくれるという万能薬ではない。「聞かれても、返答できない」というところが必ずある。赤信号が点滅している所にぶつかる。答えられない、前に進めない壁がある。そこで、その問いを哲学に求めた人たちがいた。哲学によって、青信号にしようとした人たちがいた。物理学は、このような赤信号に出会った時、ともすると哲学的になりやすい学問である。

でも、哲学に安易に飛びつくことには、注意が必要である。ガリレオやニュートンの活躍した時代に、科学ではとても答えられないようなことに、どんどん答え(意見)を出した人たちがいた。でも、そのような人たちは、今では、科学者にも、哲学者の仲間としても、認められていない。

科学が赤信号の前で立ち止まるには、それだけの理由がある。自然科学の成功は、何もかもに応えようとはしないで、赤信号が点灯することに気付いたことであろう。科学から哲学に乗り換えて赤信号の前に跳びだしても、大きな事故にあったり、タイヤが空回りすることになることが多い。哲学は、赤信号を青信号にする妙薬ではない。

哲学的な思考は、科学がどうしてこのような壁にぶつかるのか、確かな知識とはどのようなものなのか。また、そこから先にどうしても行けない境界が何故あるのかという問いについて思考することである。このようなことを根底から思考していくのが、哲学である。空想をめぐらすことではない。その結果、思いがけない発想から新たに前に進めるかもしれないし、先に進むことのできない根源的理由を見出すかもしれない。

こう考えると、哲学という領域は、注意して進めという黄信号を点滅させるものであろう。カントは、それまでの理性への全面賛美に警告を発した。黄信号を点滅

させた。そして、理性の暴走(仮象を作り出してしまう)の理由も明らかにした。さらに、この「仮象」は、人間が生きていく上でどうしても必要となることを、指し示した。理性の起死回生を図ったのが、カントである。

＊カント 1724-1804 年 『純粋理性批判』第一版 1781 年 第二版 1787 年

二 理性の世紀

ヨーロッパの 18 世紀は、「理性」への揺るぎない信頼観が表明されていた。まさしく、「理性の世紀」であった。

デカルト(1596 年-1650 年)の考える主体としての自己(精神)の存在を定式化した「我思う、ゆえに我あり」は、哲学史上でもっとも有名な命題の１つである。そしてこの命題は、当時の保守的思想であったスコラ哲学の教えであるところの「信仰」による真理の獲得ではなく、人間の持つ「自然の光(理性)」を用いて真理を探求していこうとする近代哲学の出発点を表現している。そのため、デカルトが「近代哲学の父」と称されている。ライプニッツ、そして、ヴォルフは、この思想を受け継いだ。

ライプニッツ(1646-1804 年)は、理性的に物事を理解して、物事に根拠とその結果にきちんと関係づけることを、理解困難なことに直面しても安易に奇跡や神秘に頼ることに警告を発している。現存するあらゆる物や出来事に、これを適用しようとした。すべては因果関係に貫かれていると、全宇宙を「理性」化した。しかし、ここまで行くと、まさしく独断論であろう。

ヴォルフ(1679-1754 年)は、「自然の法」をとなえた。自然とは、奇跡や神秘に対する言葉である。「自然」とは「理性」と同じ意味をもつこととなった。物事に理由や根拠のないものはない。理由の中には、すでに結果が暗黙に用意されているのだとした。そしてまた、この考えを、人々の日々の生活での実践的な･道徳的なことにも適応した。「自然の法」は、人が生きていく「人の道」でもあるとした。これを理性の法則であり、「良心の法則」であるとした。このような理性の支配を述べたヴォルフの思想は、道徳や政治の在り方を、神や宗教に求めることへの強烈な反対主張であった。

理性は出来事や物事に筋道を立ててはっきりとした脈絡を付ける能力であって、これが万人にあるとした。人種や国家、民族の境を越えて、･･･。「異」の中に「同」を見出し、「異」を越えて「和」を求めた。これは、すべての人間の中に普遍的な人間理性が宿っていることへの確かな確信(夢)があった。この思想は、当時、今のドイツの地域にいた人文系の学者たちの思想に広く深く浸透していた。異質なものに対する率直な理解、普遍的な人間の持つ理性への信頼感が漂っていた。

しかし、今日的視点から見ると、ライプニッツは独断論的になっており、ヴォルフは思想を通俗化したと言えるようだ。カントは、このような思想の影響下にありながら、ヴォルフの問いには、その説明には、程度の幅がどうしても生じると判断した。もっと徹底しなくてはならないと、･･･生ぬるいと判断した。さらに一歩前に、この思想を推し進めようとした。

三 理性の限界-「総合判断」

先ず、この「理性」って何なのかについて簡単にまとめたい。
「理性」とは、直接的認識能力である感覚器官とは異なる、間接的認識(推論)をする能力である。これによって、直接触れることのできない広い場所へ、領域へと、私たちの認識が広まる。でも、その間接性のために、ともすると厳密さとは反する誤謬へと陥りかねないものである。
また、推理の能力でもある。ある物事の理由や原因には、そのまた理由と原因がある。このように推理が働き出すと、因果関係の鎖は何処までもさかのぼる。そして最後は究極の原因を突き止めようとすることになる。極限にまで。ここに、大きな問題がある。合理的認識能力である理性は、まさしくこの徹底性のために、不合理と言う結果を招きよせてしまうこととなりかねない。
デカルトの「精神」は、他のいかなるものとも関係なく存在できる「実体」として描かれている。と言うことは、いかなる因果関係とも関係しない、それ以外の理由や根拠を必要としないものである。ここに、つまずきが内包されている。理性賛美の近代精神の出発点から、理性的思惟は万能ではなかった、と言えよう。
また、理性は、人の心をコントロールする意志決定の能力でもある。例えば、感覚的に物欲にとらわれたのを克服するのは、理性である。道徳的な行動には、理性が介在している。この介在によって、人の行動が倫理性・道徳性をおびてくることとなる。善悪の価値判断が発生する。

ヴォルフの思想を受け継いだカントは、それまでの思想家たちと同様に、理性とは根拠や原因を問い詰めていく能力であるとした。この世に置いて生じる出来事には、何事にも十分な理由があって生じる、と信じていた。そして、彼は、それは具体的にはどのような事を意味しており、結果としてどのような問題にまでつながるかをねっとりと思考した。
このような問いを発したには、それなりの歴史的意味がある。カントの立脚していた歴史的立場がある。大陸合理論(理性至上主義)を徹底しようとしたカントがぶつかったのが、イギリスの経験論の流れの中で思考したヒュームの哲学思想であった。
ヒュームは、自然界や社会的事象には客観的・必然的意味はない、とした。と言うことは、主観的な意味しかなく、偶然的な意味しかないことになる。「〇〇ゆえに、▲▲となる」という因果関係を示す接続詞は、客観的データーを指し示しているのではないことになる。「Aゆえに B」というのは、時間的な前後関係を指し示しているだけなのだ、と。人間はこの時間的前後関係を、さも因果関係として客観的に存在しているかのように誤解していると。今まで因果関係と言われてきたのは、実は、厳密な意味での法則ではないとした。こうなると、今まで固く信じていた理性能力への信頼感にひびが入り、自然科学のこれまでの研究成果など、一気に瓦解してしまうことになる。この衝撃を、カントは敏感に感じ取った。
通常因果関係があるとしているいろんなことも、よくよく考えると、この因果性は明瞭ではない。関係があり、そしてその効用が人間にとって利用できることは認識できても、その原因や理由は明確でないことが多い。内的な関係が完全にはっき

りしていることは、ほぼない。私たちにとって、その関係のメカニズムはまだまだ複雑であるようだ。いつの日か、この複雑な関係がはっきりと解明されるであろうという希望的観測の地平上に私たちは立脚しているから、この二者関係に因果関係があるとしているだけであろう。そして、いつのまにか、当たり前のこととして、ここに因果関係が客観的にさもあるがごとき思いを抱いてしまっている。

このようなヒュームの見解は、それまでのヨーロッパ大陸の合理的思考、つまり理性至上主義では、とても認められないものであった。このような見解を認めることは、それまで堅く信じてきた理性の破たんとなってしまう。

ヒュームの見解を聞いても、他の思想家たちの中には、あまり反応しなかった人たちもいた。今まで通りの主張を繰り返す人たちもいた。そのため、カント思想は、なかなか広がらなかった。また、カント以後のフィヒテやヘーゲル等は、カント思想を批判的に乗り越えようとして、その結果極めて観念的な思想を展開している。

＊フィヒテ(1762−1814)はカントの直接の後継者と言われるように、カントの問題意識の延長上に自分の思想の体系を築き上げようとした。しかし、…。カントは主観と客観を融合させようとはせずに別々の原理で説明したが、それに対してフィヒテは、この両者を同じ原理によって統一的に説明しようとしたのである。その結果、フィヒテの思想は極端な観念論に陥った。カントが目覚めた「独断論のまどろみ」に、フィヒテは進んで陥った。

＊ヘーゲル(1770−1831)思想に対する批判は、青野豊一『とんでもないことが!—美しいことを夢見て、醜いことをする—』(図書新聞社)を参照下さい。ヘーゲルは、当時の後進国ドイツの近代化を、イギリスとは異なった別の道を通っての近代化を熱望したが、それはとんでもない夢(観念論)となっている。近代国家(国民国家)間対立が激しくなる中で、ヘーゲル思想はプロイセンを支える心棒となってしまった。

ヒュームによって、カントは「独断のまどろみ」から覚まされた。そこで、カントは「根拠の根拠」を問うことで、ヒューム思想に立ち向かった。まず、これまで信頼していた理性能力を疑い、それを理性能力自身で吟味しようとした。これは、カントがそれまでの理性主義者達より、より一層徹底的な合理(理性)主義者たろうとしていたためである。そうでなければ、このような問いを発するはずがない。彼は、ヴォルフの立場から、この世において生じることは自然界や人間界のすべてが因果法則によって完全に決定されているという思想を、一層徹底しようとした。今はまだ、この関係がはっきりしていなくても、やがて科学の発展ですべてのことが判明するであろうと、信じていたのだ。彼の『純粋理性批判』では、この意識を堅持していたがゆえに、原因と結果の関係を徹底的に分析しようとしていたために、その結果として、「理性」の問題点をあぶり出してしまったと言えよう。

このような思索の結果、原因と結果という関係では「分析判断」は成立していなかった。カントは理性的な「分析判断」としての因果関係ではなくして、私たちは「総合判断」をしていることに気付いた。「分析判断」とは、主語を分析すれば述語が自動

的に分かるというものである。主語の中に、述語がすでに含まれている関係性のことである。それに対して、「総合判断」とは「分析判断」以外の関係性のことであり、主語をいくら分析してもその述語が出てこないという意味である。異質な原因と結果を結びつけるという関係を、「総合的関係」と言う。私たちは、実は日々「総合判断」をしていることが多いのだ。経験だけに頼るのではなくして、経験をきっかけとして、理性によって、さも関係があるかのように見なして価値判断している。つまり、「総合判断」をしているのだ。A→B という「分析判断」に基づく因果関係が完全に判明していることなど、あまりない。原因(A)を分析しても、結果(B)が出てくることは、あまりない。

「スイッチを押すと電燈に明かりがついた」というのは、一見、「分析判断」のように思える。でも、明かりがついたという結果は、スイッチを押すという原因にすでに含まれていたのであろうか?そうではないのだ。「スイッチを押すこと(A)」と、「明かりがついた(B)」ことは関係があっても、A をいくら分析しても B が出てこない。このことに、カントは気付いた。物事の原因と結果の関係が「分析的」ではなくして「総合的」であるとすることは、それまでの因果法則が破綻していることを、理性の限界を指し示していることを意味する。

ここに、理性の批判者としてのカントが成立した。このことを通して、カントは、「分析判断」の思想家から「総合判断」の思想家へと変身している。総合判断は、なぜ可能なのであろうか?と、AとBに因果関係が何故あると言えるのかを問い、根拠の根拠を、決定的な根拠を求めた。そして、理性が作り出してしまう「仮象」の果たしている意味を考えた。

私たちは世界が我々の見ている通りに存在していると、多くの人たちは暗黙に想定している。でも、これは、間違っている。世界は、今、私たちが見えているように、それ以外には見えないだけなのだ。私たちの持っている理性・知性の仕組みに従って、世界を秩序付けているだけなのである。この仕組みは、人間特有の一つの色眼鏡なのだ。

理性・知性は、概念を操作して世界を把握している。この概念のおかげで、一見すると無秩序に思える自然界や人間界に、秩序を見出しているのだ。でも、この秩序を求める理性は、ともすると私たちの感性を無視して、先入観で実際以上の秩序を追い求めてしまうことがある。概念は、物事を固定的に把握しがちである。無理やり、形にはめてしまいがちである、理性や知性といわれるものは、平らな鏡ではない。物事をゆがめて着色する鏡でもある。また、学問の体系は、理性によって作り出された大がかりな配置図とも言い得るものである。体系という仕組みであり、ある種の「からくり」なのだ。専門家による複雑な装置でもある。そのために、素人では、なかなか分かりにくい。どこかに間違いがあっても、すぐには発見できないものとなっている。

では、理性がこれまで築き上げた諸法則・因果関係は、まやかしなのか。ヒュームの説によると、信頼のできるものではないことになる。でも、カントは、そうではないとした。絶対的普遍的なものではないが、黄信号を点滅して観れば、多くの人に

とって役に立つ共通の認識となれるとした。

四　理性の破たん、そして、起死回生、

カントは、世界の存在をめぐる第一アンチノミーの説明の中で、時間と空間はこの世界に客観的に存在するのではなくして、人間の感性を通した認識の形式であるとした。そのことで、それまで謳歌されていた「理性」なるものに黄信号を点灯した。

第一アンチノミー

テーゼ　　世界は時間や空間的には、有限である。

アンチテーゼ　世界は時間や空間的に無限である。

このテーゼは、どちらも偽である。不確実、無限定であって、この二つは矛盾的な対立関係にあるというより、両方とも正しくない。見かけ上だけの矛盾であることを、カントは証明した。これは、それまでの理性の挫折を示している。

このテーゼの問いには、ある暗黙の前提がある。世界には、時間的・空間的な大きさ(量)があるとしていることだ。世界には、時間と空間が当然なこととして客観的にあると考えている。カントの言っているような時間と空間が世界のもつ客観的な性質ではないということは、常識的な考えでは、なかなか了承することはできない。この私たちは、日々、この時間と空間という中で生活しているのだから、当然なこととしてこの二つが存在しているではないかと信じてしまう。

だが実は、このテーゼの「世界」という言葉は私たちが存在している全体を、すべてを包み込んでいる概念であって、この極限とも言い得る「世界」の存在を証明するには、この「世界」そのものを包み込んでいる一つ上の空間や時間が必要なのだが、それがないために、存在しているとは断定できないのだ。客観的・物理的に実在するものは、空間的には何処かに、時間的にはいつかの時刻に存在していなくてはならない。でも、空間的時間的全体として想定されているテーゼに書かれているような「世界」は、それ以外の別の空間がない限り、存在しているとは確定できない。つまり、何処にもないことになる。言葉の上では、何処にもないとも言い得ることになる。こうなると、私たちは何処で生きているのか。大変おかしな話になる。

こんなことは、私たちの常識的感覚では、とても承服できるものではない。両手を広げれば、それだけの広さの空間があり、昨日・今日・明日という時間の流れは実感できるではないか。人は嫌でも、年老いていく。こばみ様のない客観的な流れがあるではないかと。

もう少し考えよう。地球の回転運動や、太陽が地球に対しては静止しているということを、私たちは実感しているのであろうか。これは、明らかに、「ノー」と言えよう。日常感覚からして、どんなに客観的に正しいとしても、この日常空間や時間を越えて普遍化されていくと、どこかの段階で、それが誤りであることに気付く。このことが日常生活で問題にならなかったために、はっきりしなかっただけである。科学

的教育がなされていくことで、今日では、このような日常感覚は「仮象」であるとされるようになった。事実としては、実はまちがっていたのだと。

このように真実なるものは、対象としているレベルで異なってくると言えよう。日常生活レベル、地球レベル、太陽系のレベル、そして銀河系のレベルとでは、真実は異なってくる。そして、極限の「世界」そのものを対象とする場合には、このような真実を求めること自体ができない、と言い得る。ここに至ると、理性を使っての認識活動は破たんしてしまう事態になる。理性を駆使して問い詰めていくと、「世界は存在していない」ことになってしまう。少なくとも、世界は我々が日頃思っている通りにあるのではないことは、現在ではそれなりに、多くの人が認識できているが、・・・。

究極の問いを発すると、その結論はゼロであった。いうおかしなことになった。こうなると、「世界」を理解するには、新たな方法で理性の起死回生をはからなくてはならないことになる。

さて、何故、「世界」が存在しないことになったのか?これは、実は、この「世界」なるものは、最初からどこにも存在していないものなのだ。テーゼとアンチテーゼで言っている「世界」は、単なる理念としてのものであって、初めから、何処にも、如何なる時にも具体的に存在していなかったのだ。この「世界」は論理的思考を突き詰めたものであって、理念として想定されているものであって、実は何処にも存在しているものではないのだ。このような時間と空間は、客観的な認識に基づくものではないことになる。

そうなると、今までの結論からすると、時間と空間は、理性的な認識ではないとなる。つまり、この時間と空間は主観的なものであり、感性の形式であることになる。でも、個人的な主観ではない、我々人間一般の認識能力に由来した共同主観となる。

感性は、視覚や聴覚に代表される受容的な能力である。この感性によって受け止められるものを、感覚的データーという。このデーターは、「いつ」「どこ」という時間的・空間的規定を伴う。だから、時間と空間は、人間が感性的な認識をする形式であることになる。

究極の絶対的な「世界」なるものは、この感性の形式を通過していなかったのだ。このような思考は、この「いつ」と「どこ」でという条件を通り越してしまっていた。また、究極の絶対的な「世界」を、感覚的なデーターとして把握する人がどこにいるのであろうか。「有限」か「無限」か、なんてことは、まさしく理性の空転(仮象)であった。感性を跳び越えた理性単独の越権行為の問いであった。そもそも、「理念(仮象)」としての「世界」は、具体的現実の時間と空間の中には存在していなかったのだから。

理性の重要性を再確認するには、理性に対して「何故」と問いかけて、一度は瀕死の状態まで追い込まなくてはならない。理性を追い込むには、理性で思考するしかない。この作業を通して、カントは理性の起死回生を図ろうとした。理念や観念を極限まで推し進めると、そこからはまったく逆の立場が生み出されてくることを、カントは見抜いている。ここでは、理性の挫折、つまりアンチノミー(二律背反)を示し

ている。

「何故」と問うのは、理性の本性である。でも、このような理性の極限的な問いは、その理性そのものの破たんをさらけ出していることになる。因果法則には、限界がある。時間的・空間的に確定できる物や出来事では、理性に基づく因果関係とみなしているものはそれなりに成立する、としてもよいであろう。ヒュームのように懐疑論に落ち込む必要はない、と言えよう。

理性に基づく因果関係は、そのままの姿で自然界に存在しているわけではない。この因果関係は、理性の行う思考枠が作り出したものである。感性に受動的に受け取られるデーターへと、理性が自発的に介入をするから、関係性を認識できるのだ。感性と理性が協力して知る限り、・・・。自然界や社会的出来事に適応される因果関係や法則等は、理性の行う思考枠が感性と協力して、そこに見出したものである。因果関係や法則そのものが、この私たちの住む世界に存在しているわけではない。

これが、「総合判断」が成立する理由である。

五 「超越論的仮象」

私たちは、このような間違いを、理性の誤作動をしていることがよくあることに留意しなくてはならない。黄信号を点滅させなくてはならない。理性は自分が思い描いた理念を、さも実在するかのように自信をもって反応することがある。『純粋理性批判』の最初に、次のように書いている。

> 人間の理性はある種の認識において、特殊な運命をもっている。すなわちそれは、理性が退けることもできず、答えることもできないような問いにわずらわされるという運命である。退けることができないのは、そのような問いが理性の本性によるからである。答えることができないのは、そのような問いが理性能力の限界を越えているからである。

カントは、粘着質の理詰めの人であろう。そうでないと、ここまで思考することはなかなかない。理詰めで思考すると、その結論は、理性の破たんということになってしまった。理性の陥る「仮象」は、感覚的なデーターとしては何も示さないものである。理性の極限としての「世界」そのものなんて、そもそも観測機器の対象ではない。

「仮象」には、通常の感覚的・経験的な「仮象」と、経験を越えてしまう「仮象」がある。この後者を、「超越論的仮象」とした。これは、人間にとって、理性固有のどうにもならない振り払うことの難しい、知らぬ間にすっと、紛れ込んでくるものである。

そこで、カントは、理性がどうしても暴走してしまい「仮象」を生じてしまうその理由と、人にとってその「仮象」の有用性をはっきりさせようとした。この問題性のある「仮象」を、人はどうしても抱いてしまう。だから、その理性固有の「超越論的仮象」の、人にとっての意味を考えた。これは、理念と言い換えることができる。「理念」は、人が生きていく上で、どうしても必要なものだから、・・・。

理性は、自分の作り出した「理念」がさも実在するかのごとく反応してしまう。「理念」は物理的な実在物ではなく、理性能力の投影像ともいえるものである。この像に対していかなる言説も、客観的にはその意味をなさない。理念(仮象)は、はっきりした直接的な形では現れない。真理を装った「仮象」という形態になる。別の言い方をすれば、見せかけ、見かけ、先入観、錯覚等として現れてくる。きつく言えば、理性の誤作動と言い得るのが、「仮象」であろう。でも、「超越論的仮象」には、大きな意味がある。

理性の作り出す理念(仮象)を、軽視する人がいる。理念は、無意味なのであろうか。そうではない。今まで述べたように、理念は、リアリティを示している。「単なる理念に過ぎない」と非難されることもあるが、理念を現実世界に投影することで、自分と世界にリアリティを指し示そうとする働きがあるではないか。

理念(仮象)は、地平線のようなものである。遠くを見れば、地平線は確かにある。でも、どこまで行っても、そこには到達できない。この意味では、観念的なものである。だが、この理念があるから、私たちの思考や行為を導く力となっている。理念を欠いた行為は、刹那的で場当たり的な愚行に終わることが多い。長い時間で考えれば、理念は利することがあるのだ。理念を欠けば、時間のいたずらな流れか、悲惨な流れが繰り返されることがあっても、歴史の意味はあり得ないことになる。だから、理念はいつも、ある種のリアリティがあり粘り強い力をもって私達を導いている。

理念の地平を観ると、私たちの視野は広がり、日常の制約から解放される。それはあたかも、向こうの水平線から見知らぬ船が浮上してくるがごときものである。新しい対象を創造する力となる。

カントは経験的な知識の獲得を旅に例えている。旅の見取り図(理念)がなくては、いつまでも狭い視野から抜け出せないままとなるであろう、と。

六　理性の起死回生(その二)

ライプニッツやヴォルフ等は何事にも理由と結果があるとして「理性」を賛美したが、これは、当時の人々の精神を支配していたキリスト教的な価値観への批判に力点が置かれていたためであろう。そのために、多くの思想家たちは、このヒュームの見解に対して、心が揺り動かされなかった。また、このような人たちは、異文化ともいえるヒュームのような考えに対応するだけの柔軟さがなかったのだ。

この差は、地理的・経済的条件も関係する。カントは当時の東プロイセンの首都ケーニヒスベルク(現ロシア領カリーニングラード)に居た。この地は、当時バルト海貿易で、経済的繁栄をしていた。市場での貨幣による商品交換関係が日々盛んに行われていた。でも、当時のその他の地や東欧の地では、農奴制による農業生産に基づく社会関係であり、キリスト教に基づくものの見方が色濃く残っていた。プロイセンで農奴の解放がなされるのは、対ナポレオン戦争に敗北してからである。これは、『純粋理性批判』の発刊の30年以上後のことである。

カントは、貨幣による商品交換関係が盛んになされていた社会関係で生きていたのだ。ケーニヒスベルクの繁栄で、近代的市民層(ブルジョアジー)たちは、活気に満ちていた。このような市民層やイギリスの商人たちとの交流を通して、カントは近代的市民の一員として自覚していたのだ。

だから、「理性」を行使する主体である人間の「自由」について、カントは思考した。

人間に、「自由」はあるのであろうか。「自由」は、因果法則に対してどういう関係に立つのであろうか。

自然界の因果関係は、原因と結果の関係は、次々と続く。原因の原因、そして、その原因は、と続く。でも、「自由」は、この連鎖を断ち切るものである。先立つ原因ではなくして、出来事を自ら開始する能力のことである。時間の流れを断ち切り、それまでの出来事に関係なく、あることが考えられてなされると、そしてそれが周囲の時間の流れの中に作用してくると、これは、新しく出来事を開始する原因となる。先立つ原因を必要としない第一原因、それが「自由」である。

それまでの因果関係を断ち切るのだから、ライプニッツやヴォルフ等の理性賛美の思想では、このことについての問いが成立していなかった。カントは、ヒュームの衝撃で、それまでの人たちとでは立脚している地平が異なっていた。

第三アンチノミー

テーゼ　　自由はある。自由による因果性の始まりもある。

アンチテーゼ　自然の因果性しかない。

「自由」を駆動させるのは、人間の理性である。これは感性という人間のもっている五感を使用した認知能力と区別されるものである。感性が受容性の能力であるのに対して、理性は自発性の能力であると言えよう。だから、「何々なので」と言った仕方で、つまり新しい因果関係を作り出そうとして、与えられている感覚的データーに介入していくのだ。つまり、理性は、時間の制約からはみ出しているものである。つまり、理性は、「超時間性」と「自発性」を発揮する能力である、と言える。

このように、何事かを自ら開始して、超時間から時間性のある現実世界に作用すると、これは最初の第一原因としての「自由」を使っていることになる。理性自らが原因として、開始することになる。先立つ原因なしに、自らに由来することをなし得るのが、「自由」なのである。つまり、「自由」とは「理性」の別名であるとも、言いえる。

もう一度、問う。人間が生きていく上で「自由」はどういうものであるのか?大陸合理論の因果関係にガチガチに固められた予定調和的なものの見方では、「自発性」を発揮する「自由」が成立する可能性ははなはだ少なくなる。そしてまた、ヒュームの指摘を受け入れると、このように思考している自分の存在すら、怪しくなる。「私は私である」とする自我などは、どこに成立するのであろうか。この自我がはっきりしなくなると、これは大変な事になる。このような狭間で、カントは何年も思考し

た。

近代社会の形成途上で、自由な意志の主体として、「人格の尊厳」が説かれてきた。尊厳されるべき人間存在は、ひとえにこのような「自由」という考えに基づいている。「自由」があるからこそ、・・・。「自由」は、なくてはならないものなのだから。このようなことをできる人間存在を、私たちは「かけがえのない」ものと認識しているのではなかろうか。

カントは、深刻に、思考した。思考することにたくさんのエネルギーを費やした。そのために、他のことはワンパターン化して消費エネルギーを極力少なくした。いつも決まった時刻に散歩に出かけたりした。

「自由」ということについても、いろんな「自由」がある。あいまいな「自由」では、かけがえのないものとはならない。各人が勝手気ままにする、という「自由」もある。でも、これでは、結果として「何をしても、大きくは変わらない」という意味になりかねない。そして、どうせ何をしても「初めから決まっているではないか」という宿命論に転化しかねない。そうではなくして、明瞭な決定根拠をもった「自由」が確保されなくてはならない。このことは、言葉としては相反しているが、このような明瞭な「自由」をカントは模索した。

このアンチノミーは、相互に対立的関係にあるが、第一アンチノミーと異なって、この二つは観点や条件によって、どちらも正しいと言えるのではないか。第三アンチノミーは、ともに共存できるものなのだ。この二つは、世界の出来事をめぐる二つの相互補完的な視点である、とカントは考えた。

カントにすると、因果性には二通りあることになる。

①自然界の因果性
②「自由」に基づく因果性

人間は身体を持っている自然的、そして感性的存在である。つまり、動物なのだ。その限り、時間と空間の中にいて、自然の因果法則に従っている。その一方で、人間は理性的存在でもあり、自由な意志を備えた存在でもある。人間は理性を持っているので時間の制約を免れている。

そのため、その行為の結果がそれ以前の諸条件や原因に 100%起因することはない。だから、彼が〇〇したことの理由を因果関係として推測することができても、それゆえにその人の行為の結果責任を完全に免れることはない。いろいろな不幸が重なったために社会的な悪行をしたとしても、その人間の行ったことに対して、責任は追及されることとなる。

だから、例えば、自分の成育環境が劣悪で犯罪のため逮捕されて、そこから立ち直るには、新しい自分づくりをしていくには、その人の自分の成育環境の問題をも自分の責任であるかのごとくみなして、それを引き受けることしか新しい自分づく

りはできない。人は、自分の過去をすっかり捨て去ることはできないのだから。自分の過去を見つめて、自分には直接的責任がないようなことまで自分に責任があるかのごとく認めることで、別の選択肢があったことに気付くことで、「自由」な意志をもつ主体として新しく生まれかわれる。過去への真剣な反省を通して。だから、犯罪事件を裁くには捜査の時「自白」を導くことや、長期にわたる裁判は、人の生き直しには必要な事なのだ。

これが、カントのいう物事の出発点としての、意志の自由論である。人は、自らの意志を持って誕生するのではない。また、男であることや、女であることを事前に承知して生まれてくるわけではない。でも、人間であることを、男や女であることを引き受けることで、男の人に、そして女の人になる。こうみなすことで、自ら判断して行動して、その結果の「責任」をとれる一人前の社会人になれるのだ。

カントは、自然の因果決定と自由による因果決定という二つの異なっている決定根拠を区別している。自由による因果性は、その背後にさらなる原因を持たない究極の原因として作動するものとしている。理性的・合理的決定理由の極限(自由)は、もはやこれまでの因果関係の法則に基づくものでない。

だから、道徳的に正しいことをしようとする時の決定根拠は、理性の法則そのもの、「道徳法則への尊敬の念」が動機となる。この理由をあげるとすると、同語反復となってしまう。「ウソをつくべきでないから、嘘をつくべきではない」という風に、その行為がどんな理由にも制約されない無条件な行為であることを意味する。理性が道徳法則という理性自身を決定理由とする実践において、理性は無条件で絶対的な力を実現できる。このように、理性は実践(道徳)の領域においては、絶対者を求め極限に迫ろうとする。このようにつべこべ言わせない無条件な道徳的在り方が、カントの言う「定言命法」である。「定言」とは、断言的・絶対的という意味である。

カントの道徳論については、ここでは詳しく記載しないが、一つだけ言っておけば、このような「道徳法則への尊敬の念」と言われると、多くの人にとって、不信感や怪しさを感じるであろう。そのような根拠に基づく純粋な行為なんて、普通はないのではないかと。このような事を言い出す人は、あやしい、と。その言葉の裏には、とんでもない悪意がひそんでいるのではないか、と。

でも、それは、私たちが自分について誤解しているのだ。心の底では分かっていても、そのことについてきちんと気付いていないだけなのだ。

私たちは自分の行ってきた過去の行為に対して「やましさ」を感じたり、後悔の気持ちになったことがあるはずである。この心は、「マイナス体験」として抱かれている「道徳法則への尊敬の念」そのものではなかろうか。この意識は、拒み様のないリアリティをもって私たちに迫ってくる。後悔の念は、時間がたっても、時として、強く迫ってくることがある。この後悔の思いに心深くとらわれて、日々反省するのが私達である。煩悩具足の凡夫である私たちは、この思いがあるからこそ、自らの行為を律することができているのではなかろうか。

理念としての「自由」が虚構としてではなくして、現実に作用する一つの因果性として確実に現れ出ることは間違いないことである。「道徳法則への尊敬の念」とし

て、・・・。このように、超時間性のある理性に起点(根拠)をもつ道徳が法則として現実の時間と空間(感性)の中に入って、立派に作用する。この超時間的な根拠こそ、自ら決断して新しく始める「自由」にほかならない。結果をもたらすのであるから、「自由」にはリアリティがある。これが、決定根拠のある「自由」である。

でも、「道徳法則への尊敬の念」が、「プラス体験」として現れ出ることは、なかなか難しい。やましい心がまったくない、打算のまったくない実践は、なかなか現れにくいであろうが、・・・。これが、煩悩具足の凡夫である私たちの実際の日々の姿であろう。でも、愚かな過ちを繰り返しながら、そのたびに「道徳法則への尊敬の念」に立ち戻ることで、私たちは自分のため、人のためになる行為をなすことができるようになるのであろう。これは、人間の弱さを自覚した上で、それを克服するために理性が選択するであろう長期的な戦略である、と言えよう。

カントの『永久平和論(1795 年)』では、人は戦争という愚かな行為を繰り返すが、そのたびに大きく傷つき反省して、そして国家間対立をなくしていく取り組みをしていく、と書かれている。先の戦争を反省して、EU が結成された。また、いろんな弱点があるが、国連も一応機能している。「日本国憲法」も、左右の政治勢力からの批判にさらされながらも、今も不十分ながら機能している。

カントは、フリードリヒ2世(在位 1740～86 年)の時代のプロイセンに生きていた。オーストリア継承戦争(1740～48 年)、七年戦争(1756～63 年)の時代である。七年戦争時にケーニヒスベルクは、5年間、オーストリア側についたロシアに占領された。『永遠平和のために』は、これらの戦争やフランス革命の激動(1789 年～)の体験に基づいて書かれたものである。

貨幣を通した市場での商品交換関係が広がることで、それまでの共同体は解体される。個々人が一度バラバラになることを通して、一個人として他者と関わる関係が当たり前の関係として登場してくる。つまり、近代的個人が誕生した。このような社会での、「自由」の在り方をカントは思考している。

ここに、哲学という営み全体を動かす回転軸を、カントは見出している。「理由」「根拠」「原因」等の鎖を極限までたどると、この「自由」に到達する。これらの鎖の各項は、いずれも理性の変容したものであり、「自由」こそが理性の最終的な変容体である。

「天」や「神」を引用して説明するのでなく、また日々の経験だけに頼ることもなく思考したのが、「自由」理念であった。しかし、ここの述べられた「自由」からは、無からの創造をにおわせている。神による無からの創造を類推させている。しかし、理性的な存在としての人間は、「自由」ゆえに自己の行為の創造者であっても、世界を創造してはいない。自由→その結果＝神→世界の創造と類推する人がいるが、この比例関係は類比であって、「自由」＝「神」ではない。「自由」と「神」は、ともに時間性から免れているが、・・・。

それまでの因果関係を断ち切り、新しく始めるのであるから、「自由」を行使するには、それなりの「責任」を伴うことになる。人間固有の価値である「人格への尊厳」の意識は、「自由」があり、「責任」が取れることで成立するものである。

各諸個人が「自由」に思考して行動することができないでは、人間として認められていないことになる。「自由」を抑圧する職場の人たちや、旧態依然たる地域の慣行などは、この価値観にまったく目覚めていない。でも、このような人たちは、抑圧をしていることの間違いに気付いていない。悲しいかな、正しいことをしていると、本当に信じているのだ。だから、このような人たちとはなかなか会話が成立しないこととなる。

私たちはこのような現実社会の中で生きているのだから、この社会の荒波に立ち向かうには、その人なりの「理念」をもっていなくてはならない。人が生きていくには、「理念」は必要なのだ。この理念の実現は難しいものであることが予想されても、私たちが簡単にはたどり着くことのできないものであるが、でも、私たちを明日へと導くものである。

しかし、ヘーゲルのように言葉に酔って、「美しいことを夢見て、醜いことをする」事態になってはならない。また、私たちの思考は揺れ動き、「独断論のまどろみ」に落ち込み悪をなすこともある。だから、私たちは、黄信号を点滅させながら、多くの人たちとその「理念」についての討議を、事あるごとにしていくことが必要となる。

参考文献　石川文康(筑摩書房)『カントはこう考えた-人はなぜ「なぜ」と問うのか-』

補説　①

カントはニュートン力学を哲学的に位置づけたとされているが、それは違う。ニュートン力学では、絶対空間と絶対時間を前提として組み立てられている。しかし、この絶対空間と絶対時間は、理性の限界としての理念(仮象)である。これは第一アンチノミーについての記述のように、このことについては「ある」とも「ない」ともどうにも確かめようのない不確実、無限定なことである。

カントは時間と空間は私たちの五感の特性によって認識しているものであり、感性の認知の形式であるとしているのであって、物理的運動は相対的なのだとしている。

補説　②

日本社会には、「人格への尊厳」を大切にすることがなかなかできない思想体質があるように思える。それは、どうしてであろうか。『甘えの構造』土居健郎(弘文堂)には、次のように書かれている。ここに私たちの日本社会の思想体質の大きな問題が書かれている。　＊線は、青野が付けた。

> 内という日本語が、身内とか仲間内というように、主として個人の属する 集団を指し、英語のプライベートのように、個人自体を指すことがないのは注目すべきことである。日本では、集団から独立して個人のプライベー

トな領域の価値が認められていない。したがって人格の統合の価値が認められるということもあまりない。

日本には集団から独立した個人の自由が確立されていないばかりでなく個人や個々の集団を超越するパブリックの精神も至って乏しいように思われる。そしてそのことも、以上説明してきた内と外という風に日本人が生活空間を区別し、それぞれにおいて異なる行動の規範を用いても、一向に怪しまない事実に由来すると考えられる。日本人がいわば理性的に行動するのは遠慮のあるばあいであるが、しかしこの遠慮を働かせねばならないサークルも、遠慮を要しない外部の世界(＊まったく関係しない他人の人たち)に対しては内と意識されるのであって、本当の意味でのパブリックではない。だいたい内と外という分け方が個人的なものである。しかもそれが社会的に容認されているのであるから、パブリックの精神が育つわけはないのである。内外の区別ははっきりしているが、公私の区別ははっきりしないのであるから、公私混同が起きるはずであり、…。

対人関係で内と外という風に生活空間を区別しているというのは、自分と関わる世間には気をつかうが、直接的に関わることのない広い社会的な事柄に対しては関心を示さないし、極めて冷淡な態度をとることとなる。

原発の問題で、このようなことがはっきり表れている。あれだけの事故があったというのに、…。地球の反対側で起こった出来事のように、自分とは関係ないこととしている言動をよく聞く。

先に紹介した青野の本には、このようなとんでもない社会関係が平然となされようとしていたことに対する私の見解(怒り)とその結末を書いている。

補説 ③

カントの居たケーニヒスベルク

カント(1724～1804)は当時の東プロイセンのケーニヒスベルクに生まれ、一度もこの都市の外に出ることなく生涯を終えた。この地は、今はロシア領カリーニングラードになっている。

ケーニヒスベルクはドイツ騎士団領の砦として、13世紀半ばに建設された。14世紀半ばにはハンザ同盟の一員となり、バルト海に臨む港町として発展していった。ドイツの他の都市との違いは、東はずれ(1772 年のポーランド分割までは、飛び地)にあるために、リトアニア語圏やポーランド語圏やロシア語圏との交流があった。

カントの時代はケーニヒスベルクが繁栄の時期で、イギリスやオランダの船が出入りし、移住してきたフランス人(ユグノー、追放されたカンビン教徒たち)も活躍していた。ユダヤ人も商業・金融に携わっていて、都市の文化水準も上昇していた。

1758-1763 年の間、ロシアに占領されていたが、ロシアのヨーロッパ文化への強い憧れは、この地の大学のアカデミズムの地位を引き上げることになった。また、このロ

シアの占領によって、身分や階級が急激に流動化して、それまでの支配・被支配の関係が意味をなさなくなった。そのため、様々な身分の人と、多様な国籍や民族の人たちの間で、旧来の形式にとらわれない多様な人間関係が成立することになった。まさしく、コスモポリタン的となった。カントのコスモポリタニズム(全世界の人々を自分の同胞ととらえる思想)は、このような生活実態に基づくと思われる。

商品交換が盛んになされていて、この流通網を通して、各地の新聞・雑誌が出回っていた。出版業者は自前の作家・文化人を確保するために、盛んに援助していた。カントも、このような出版業者宅に下宿していた。

また、カントの曾祖父・祖父は、スコットランドからの移住者であった。スコットランドの哲学者ヒュームから大きく影響されたのは、このことが関係しているかもしれない。このように、多文化の状況が、日々の生活の中にあった。カント自身が、次のように書いている。

「一国の中心である大都会であって、そこには、国を統治する諸官庁があり、一つの大学(諸科学の陶冶のための)をもち、さらに海外貿易の要地を占め、したがって国の奥地から流れてくる河流によって奥地との交流を助長するとともに、言語風習を異にした遠近の国々との交通にも便利であるような都市、たとえばプレーゲル川に沿ったケーニヒスベルクのごときは、たしかに世間知をも人間知をも拡張するのに恰好な場所と考えることができ、そこに居れば、たとえ旅行しなくとも、このような知識を得ることができる。」(『人間学』序文、坂部恵訳)

この地は、ヨーロッパ的世界から見ると辺境であった。ヨーロッパ的な文化の境界地であった、そして、非ヨーロッパ的なものとの接触点であった。だから、自分の属しているヨーロッパ的なものの、そのアイデンティティが強く自覚される地であった。そしてまた、自分たちが正しいとしている価値観の主観性・相対性が、その限界が自覚される地でもあった。そのため、自分の理性によって、その形式によって、理解可能の領域が拡大していく最前線であり、その中心地でもあったと言えよう。このような時期に、このような地で、カントは思索した。

しかし、この繁栄は、長く続かなかった。カントの死去の時期あたりから、中継貿易の拠点であったケーニヒスベルクは衰退していくことになる。

1930 年代からは、この地はナチスの支持者が多く、ユダヤの民への虐待がなされた。そのため、連合国から激しい空爆をされて国土はガレキと化し、老人と子供たちと少数の大人たちだけが生き残った。戦後ロシア領となり、生き残ったドイツ人の多くは国外追放された。

カントのコスモポリタニズムは、この地に根付くことはなかった。でも、悲しむことはない。人の歴史は、このようなとんでもない過ちで大きく傷つきながら、そのたび反省して、「道徳法則への尊敬の念」にたちもどることができているのだから。